
星の使徒 ～古の賢人～

円入健策

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の使徒 ～古の賢人～

【Nコード】

N0795BA

【作者名】

円入健策

【あらすじ】

時の止まった少年は、一つの剣によって導かれ、剣のように気高く何ものをも貫く強い意志を持って、自ら心を取り戻した。
滅亡の使者、安倍神一を倒し、漆黒の霧につつまれた世界に再び光を照らし出し、
彼は何処かへ消えてしまった。

ヨハネを愛したエレミアは、毎年、彼の誕生日である7月7日に、

星のよく見える山へ行き、帰りを待っていた。だが、彼は再び姿を見せなかった。

エレミアは魔術学園ポラリスを卒業。その後、学園の超能力学部
の講師に就職した。

時と共に成長を重ねるエレミアであったが、彼女の思いは変わらなかった。

ある日、エレミアは天才少年カールと再会し、相談を持ち掛ける。カールは過去の世界に渡ることの出来るタイムマシンの話をし始めた。

しかし、歴史を変えてしまう恐れを知っているため、途中で話をやめてごまかした。

気になるエレミア。再び話を掘り起こそうとするが、カールは「なんでもないよ」と

口を閉ざす。仕方なく、エレミアはカールと別れ、研究所を去ろうとした。

しかし、彼女の野望は抑えられることはなく、関係者以外立ち入ってはならない区域をくまなく調べた。

やがて、一つの実験室を見つけた。そこには製作途中であるタイムマシンがあった。

「もしかしたら、このタイムマシンを使えば過去に戻ってヨハネに会えるかもしれない」

確信したエレミアは勝手にタイムマシンに乗り込み、電源をオンにして、

起動させてしまった。何かの拍子に機体に支障が生じ、警告音が鳴り響く。

警告音を聞いて駆けつけたカールは降りるように叫んだが、エレミアの固い意志には届かない。

タイムマシンは眩い光を發し、エレミアの姿を消してしまった・・・。
慌てふためくカール。

タイムマシンによって飛ばされたエレミアの運命は果たして・・・。

オープニング（前書き）

第一部「ヨハネの大冒険」の続編です。

第二部をお読みになる前に第一部を読んでいただけると、なお楽しめるかと思えます。今回は長旅になりそうですが、何卒お付き合いの程よろしくお願い致します。

オープニング

オープニング

滅亡の使者、安倍神一が待ちつける宇宙ステーション。

ヨハネたちは彼の目の前に立ち、今まさに激戦を繰り広げている最中だ。

神一はエンの猛攻に追い込まれ、醜い真の姿をさらけ出す。

自暴自棄になってしまった彼の行動によって宇宙ステーションの自爆システムが作動。

爆発まであと15分。ヨハネはみんなを逃すため、神一の攻撃を食い止める。

エレミアと一緒に逃げようと言い、その場をためらっている。

「早くいけええええー！」

ヨハネの叫ぶ声によって服従するかのようになり、仲間たちは逃げ去った。

再び振り返ったエレミアの顔を見て、ヨハネは笑顔で返した。

エレミアは胸が締め付けられそうになり、一度足を止めてしまったが、

感情を振り切つて、すぐさまその場を去った……。

あれからどのくらい経ったのだろうか。

かならず……、必ずヨハネは帰ってくる。

いつもの日常に戻り、不安定な精神の中で何とか自分を保っている。いろんなバイトをして、たくさん勉強もした。

夢であった、魔術学園ポラリスの超能力学部講師にもなった。休む暇もない日々を送ったが、唯一、ヨハネのことだけは忘れなかった。

ヨハネの誕生日である7月7日。

エレミアは綺麗な星の景色が見渡せる観光スポット、星降る山に登り、

ヨハネの帰りを待っていた。

しかし、いつも返事として帰ってくるのは、星の輝きと月の微笑みだけであった。

時は進んでゆき、エレミアが二十歳になったころ、

あきらめずにもう一度、星降る山に登って空を見上げた。

今年もおなじ星空。だめかな……。ヨハネに逢いたい……。

切ない気持ちでいっぱいになり、涙をこぼした。その時、一つの流れ星が流れていった。

その流れ星はまるでエレミアを励ましているかのようだ。

もう一度逢えますように……。

そう願いをこめたエレミアはいつの間にか元気を取り戻していた。

日曜日。エレミアは休みを利用して、ある人物のもとへ会いに行くところである。

「今から行くね」と電話をして家を出た。鼻歌を歌いながら、玄関の門を閉める。

今日は特別に気分が良い。そのわけは、この前の星降る山で流れ星を見たときに、

とあることを思いついたからだ。その計画を実行するためにドイツ

へ旅立つ。

着いたところはアストラル大学。そう、あの天才少年カールと会う約束をしていたのだ。

待合場所で約束していた一階の院内自然庭園へ移動した。

そのなかに緑色のベンチがあり、そこにカールが座って待っている。

カールはエレミアに気付いて走りよってきた。

「ミアねえちゃん、久しぶり！」

「ひさしぶりだね！元気してた？」

二人はベンチに座り、久々に再開した喜びを分かち合っている。エレミアが講師になったこと、カールが名誉教授になったこと、互いに今まであった出来事を話していた。

会話のネタがそろそろなくなって来たとき、

エレミアは本来の目的である、あることを聞き出す。

「あのね、カールくん、ちょっと聞きたいことがあるの。」

「うん、なに？」

「昔に戻ることって出来る・・・？」

あまりにも唐突な質問であったが、カールは気にもせず答えた。

「もちろん可能だよ。時空移動が簡単にできるタイムマシンを・・・」

カールは熱意にタイムマシンを語り始めようと思ったが、エレミアの思考を読んで、語らずにはいられない欲を抑えつつ話を絶った。

おそらくはヨハネと再会するために過去に戻るのであろう。

そうならば、たった髪の毛一本のような些細な出来事に触れてしまえば、

歴史を大きく変えることに繋がってしまう。

それを恐れたカールは、なんとかごまかそうと嘘をついた。

「あくでも、まだ実験段階中で、実際に僕らが使える状態じゃないんだ。

200%の安全な結果が得られるまでには、まだまだ時間がかかるんだ。」

「そうなんだ……。」

エレミアは沈んだ表情を見せた。カールはエレミアの気持ちを考えて言葉をおくる。

「ミアねえちゃん、元氣だして。

僕も歩む道に大きな壁が立ちふさがって何をしてもだめな時、新しい道を作って前に進んできた。

ミアねえちゃんも新しい道を作ってみるといいよ。」

「……うん。ありがとう、カールくん。」

約束の時間が過ぎようとしていた。名誉教授となったカールのスケジュールは

ぎっしりつまっていて、ようやく手にした憩いの時間であった。

二人はベンチから立ち、わかれの挨拶をした。

「ありがとう、カールくん。せつかくの自由な時間なのに。」

「ううん、いいんだよ。ミアねえちゃんに会えてよかった！

こんどは一緒になにか遊ぼうね！」

「うん！」

カールは名残おしそうに、手を何度も振って行ってしまった。

エレミアは少し微笑んでいた。先ほどカールが嘘をついていたことに気がついていたので。氣遣ってくれたカールにありがとうと心でつぶやいた。

「私ってちょっと性悪かな。」

そう思いながら、さきほど超能力の一つ「マインドハック」でカールのイメージから見えていたタイムマシンの場所へ向かおうと試みた。

だが、その行く場所の途中では何名もの研究者や警備員がうるついている。

見つければ追い出されるに決まっている。

そんなこともあるのかと、エレミアはインビジブルポジションという、

透明人間になれる薬を持ってきた。

自然庭園の茂みの中に隠れて、ポシエットから薬を取り出して飲んだ。

みるみるうちにエレミアの姿が消えていく。

「これで大丈夫ね。効果が切れる前に早く行かなくちゃ。」

エレミアはカールのイメージを頼りに、進んでいった。

以前行ったことのある工学部の前だ。もちろん扉にはセキュリティでロックされている。

後ろから研究員がやってきて、認証を済ませると扉が開いた。

そのチャンスを見計らって、一緒に奥へと入っていった。

東京ドーム一個分の広さを持つロボット研究開発施設。

その中に特設された部屋がある。

『タイムマシン研究室』

この部屋には特別配属された研究員でしか入ることが出来ないようだ。

エレミアは鉄の自動ドアの目の前に立ち、腕を組み、どうしようかと考えていた。

「早くしないと薬の効果が消えちゃうし……、どうしよう……。」

「

考えているうちに、いきなり自動ドアが開いて中から研究員が出てきた。

エレミアはわずか数センチ手前にいるハゲた研究員の顔をみて思わず声を出してしまった。

「うわっ！」

研究員はその声に驚いてあたりを見回した。

エレミアは手に口を添えて、そっと部屋の中へ侵入していった。

(あゝびっくりした。いけない、いけない……)

でもよかった。入ることができて……)

自動ドアが閉まり、ガシャンとロックがかかる。

いくら透明人間になったとはいえ、心臓のドキドキはおさまることを知らない。

ようやくタイムマシンとのご対面。

白銀のボディー。外郭には巨大リングのようなものがついている。

中には一人用の座り心地のよさそうなソファのような椅子があり、乗り込んで内部の操作パネルでマシンを扱うようだ。

幸運にも、今出て行った研究員以外に誰もいないようだ。インビジブルポーションの効果もちょうど切れた。

「いましかないわ。」

エレミアはタイムマシンに乗り込んだ。

それと同時にオートでタイムマシンが稼動する。

グーン・・・ シュウイーーン・・・

手前にあるタッチパネルに明かりがともり、無機質な音声ガイドが流れる。

『こんにちは。時空旅行をお楽しみください。今日はどちらへ向かわれますか？』

パネルに過去と未来の文字がうつしだされた。

エレミアは過去のボタンをタッチした。

『過去ですね。忘れそうになったあの時の思い出、再び体感して心に刻みましょう。』

次に、行き先となる年月日、時間を設定してください。』

「うーん、4年前だったらヨハネもまだ家にいる頃だと思っし・・・きめたっ！」

エレミアは今から4年前の時間を設定した。

『確認してください。以上の設定で過去へタイムワープします。内容がよろしければ、確定ボタンをタッチしてください。』

エレミアは満天の笑みを浮かべながら、確定ボタンをタッチした。

「やっとこれでヨハネに逢えるんだ・・・！」

タイムマシンのエンジン音が大きくなり、外郭のリングが高速回転を始める。

『それでは良い旅を。』

嬉しさのあまり、待ちきれなくて足をぶらつかせている。

タイムマシンのあたりに白い光で包まれる。

部屋の景色が、覆われている光によって見えなくなるその時である。

ガンッ！

ぶらつかせていたエレミアの足が激しく機体にぶつかってしまった！その衝撃でタイムマシンは誤作動をおこし、警告音が鳴り始めた。

ピュイピュイピュイピュイピュイ・・・

「あれ？私なにかマズいことしちゃったかしら・・・？」

この警告音がロボット研究開発施設のメインルームに伝わってしまった！

ちょうどそこにカールがプロジェクトチームと会議をしていたころだった。

突発的な警告音を耳にした一同。カールは椅子から立ち上がった。

「ま、まさか、ミアねえちゃん！」

急いでカールと数名の研究員はタイムマシン研究室へ駆けつけた！

「ミアねえちゃん、はやく赤い緊急停止ボタンをおすんだ！」

エレミアは緊急停止ボタンの場所を目だけで確認した。

・・・しかし、カールの声が聞こえていないふりをして、動かずにじっとしている。せっかく手に入れたチャンス、絶対に失いたくない。

タイムマシンから眩しいくらいの光が発し、とうとうエレミアを過去におくってしまった。

カールはただ呆然と立ち尽くす。

「ああ・・・どうしよう・・・。大変なことになっちゃった・・・。

」

エレミアはタイムマシンに座っている。

周りの景色は真っ白で、時たま過去に目にした人物、建物、風景が下から上へと

飛んでいく。どんどん過去にさかのぼっていく。

ヨハネの姿が見えた。

しかしそれを通り過ぎてしまい、更に深い谷底に落ちていくような感覚を味わう。

「あっ！ヨハ・・・どこまで行っちゃうの？4年前に設定してたのに!？」

エレミアはタイムマシンのパネルを再確認した。

『415年3月21日』

「415ねん?!どういうこと?・・・あっ、まさか・・・」

エレミアは思い出した。

足をぶらつかせていた時、機体に思い切りキックしてしまったことを。

頭を抱えながら、やってしまったことに後悔を感じている。

「どうしよう・・・私この先どうなっちゃうの・・・?」

ガタガタガタ・・・

機体から音がする。

何だろうと思い、機体の周りを見た。

大変なことに、まるでスペースシャトルが切り離しをするかのよう

に、一つずつ部品が外れて行き、時空の狭間に飛んで行っているではないか。

「このままじゃ私も消えちゃう！たすけて〜！」

最後に椅子だけが残り、その椅子も消えてしまったその時、真っ白いあたりの景色が見たことのない木造の屋内へと入れ替わり、エレミアは強烈なしりもちをついた。

ドスンッ！！

「いった〜い……。助かったみたい……。」

薄暗い部屋にはいくつもの研究物資が並んでいて、少しホコリくさかった。

ここは小さい一軒家のようだ。そして誰かが何らかの目的で研究を行っていたらしい。

エレミアはおしりをさすりながら、目先に見える扉へ歩いていった。この扉を開けるとどんな世界が待ち受けているのであろうか。もとのいた時代に戻ることができるのだろうか。

そして……、ヨハネと再び逢うことができるのであろうか……。彼女の壮大な冒険が、今、始まる。

オープニング（後書き）

オープニングいかがでしたでしょうか。

これからどんどん連載していきますので楽しみにしてくださいね！

【手に入れたアーティファクト】

科学者の名刺

【第一章】 因縁の戦い

【第一章】 因縁の戦い

第一節 旅支度の一週間

何年も使っていない、薄暗くてホコリくさい研究小屋。エレミアの目の前にある扉から、外の光がもれている。そつと近づき、扉を開けた。

強烈な眩しさがエレミアの目を襲った。思わず手で覆い隠す。

耳からは街人のざわめきが入ってくる。

次第に目がなれてゆき、外の景色を傍観した。

3月21日。春が訪れ、過ごしやすい季節。

ちょうど、ぽかぽかと太陽が照らしていた。

地面はレンガで綺麗な模様で敷き詰められている。

あたりの建物はレンガ造りや、岩山を掘った家がひとときわ目立つ。

カンカンと鉄を打つ音が、どこからか聞こえてくる。

鍛冶屋か何かだろう。

「号外！号外です！」

西から声がした。人々が声のする方向へ走ってゆく。

エレミアも気になって付いて行った。

広場に入ったところの大きな一本の木のそばに、多くの人ばかり。

エレミアも号外が気になって、もらおうと近寄ってみるが、人が邪魔になって手が届かない。

「これじゃあ届かないよ。」

エレミアは仕方なくその場を離れた。

トポトポと、来た道を戻っていると、いきなり突風が吹いてきて、先ほどの号外を運んできてくれた。

足元に届いたドロと水のついた号外を拾い上げる。

エレミアはその一面を見て驚いた。

『英雄、最後の戦い！』

そう書かれており、写真にはなんと、ヨハネが写っているではないか。

荒れ果てた大地にもう一人、向かい側にローブ姿の男が。

暗くて顔がはっきりしていない。記事にはこう書かれている。

『遂に！英雄ケテルと滅亡の使者の最後の戦いが始まるうとして
いる。』

「英雄ケテル・・・？でもこの人、間違いなくヨハネだわ・・・。」

更に記事を読んでもみると、決戦の場がかかれてあった。

『決戦の場はフラムベルグ大陸、ディアス帝国領土、漆黒の大地
で行われる模様。』

「きっとここに行けば・・・、ヨハネに逢えるのね！」

エレミアは確信し、目的地として決めたのだった。

しかし、自分のいる場所を把握しておらず、地図も持っていない。とりあえず、人に聞いてみようとしてエレミアは鍛冶の音がする方向

へ足を運んでいった。

歩きながら外の景色を満喫する。落ち着いたメープル調の色彩で、建物のほとんどが生産所や商店ばかり。時たま変わった突風が吹き荒れることもある。

人々はあまり外には出ておらず、車道があり、蒸気で走る車が走っている。

向かい側から、5、6人くらいの男たちが歩いてくる。

黒いススがついた白いシャツに作業ズボン、ヘルメットをかぶっている。

この人たちはどうやら炭鉱父のようだ。笑顔で話し合う炭鉱父たちとすれ違い、

エレミアの目の前に鍛冶屋が見えてきた。

店の前に大柄な男が椅子に座って酒を飲んでいた。その男はエレミアに気付いて、声をかけた。

「ん、お嬢ちゃん、こんなところに何しにきたんじゃい？」

「あ、あの・・・」

エレミアは少々不安になりながらも、この街について聞いてみた。

「がはは。見知らぬ顔だとはおもったがやっぱりそうだったか。

まあ家の中でゆっくり話そうや。か弱いお嬢ちゃんが突風の中を突っ立っておるのは

かわいそうだからな。こっちだ。」

そういって、中へ案内してもらった。

少し風化している岩山でできた家。何年も続いている鍛冶屋だ。

燃え盛るかまど、顔の大きさほどもあるカナヅチ。様々な武器や

防具が並んでいる。

エレミアは客間のテーブルにたどり着いた。

「さあ、そこに座ってくれ。俺はエドワード。よろしくな。

おい、クリス！お茶もってこい！ついでに酒もだ！」

エドワードが大声を放った。

すると、一人の青年がお茶とお菓子を持ってきて頭を下げた。鍛冶の作業中だったのか、汗だくだ。

「こんにちは。毎度、有難うございます。」

「ばかやるう、客じゃねーよ。酒はどうしたんだよ！」

「父さん昼まっばから酒飲まないでくれよ。すみません。失礼します。えへ。」

クリスはエレミアのことを気にしながらも、作業に戻っていった。エドワードは街について詳しく話をしてくれた。

「この街はなあ、ラーゼンと言うんだ。腕に技術をもった職人が集まる街さ。」

しかし面白いな。この街に来るには空路しかないのに、

お嬢ちゃんはずらにこの街にきたってか？まあ深くは問わねーがな。」

エレミアは紅茶を二口つけた後、エドワードに質問した。

「おじさん、フラムベルグ大陸っていうところはどつやって行けばいいの？」

エドワードはエレミアの発言のおかしさで笑ってしまった。

「んあ？ははは、またおかしなことを聞くもんだ。

ここラーゼンに来るためにはディアス帝国というでっけー国からしかこれねんだ。

ディアス帝国はフラムベルグ大陸にあるんだよ。

お嬢ちゃんはまたディアスに帰りたいのか？」

「う、うん。」

「そうか、がはは。この街も知らないようじゃ、飛行船乗り場もわかんねーだろうし、

ほらこれ、地図をやるよ。」

エレミアはラーゼンの街の地図を手に入れた。あとは飛行船乗り場に行けば、

ディアス帝国に行ってヨハネのいる漆黒の大地にいける。

しかし、肝心なのは飛行船にのる運賃を持っていないことだった。

エレミアはお金を持ってないことをエドワードに話した。

「そうか、金もってねーのか。そうだなあ・・・。

おなごにカナヅチもたせるわけにはいかねーし。

そうだ、1週間だけ、看板娘としてピラ配りと接客をしてもらえんかな？

そしたら分け前として運賃をやるぞ。」

「おやすいごようよー！」

エレミアは男くさい場所で働くことに少し嫌味を感じていたが、ヨハネに逢うためならばと我慢した。

しかし、その気持ちはすぐに消えることとなった。

「寝床は母ちゃんところを使ってくれな。」

そういつとエドワードはクリスを呼んで、1週間居座ることを伝えて、

寢床へ案内させるように言った。

「エレミアさん、こちらです。ここが母さんの部屋です。

いつも掃除をしていたのでキレイですので安心して使ってください。

「あ、あと、ちょっとしたら広場でビラを配ってもらえませんか？」

「うん、わかったわ。ありがとね！」

クリスは女性にあまり免疫がないのか、恥ずかしくてエレミアの顔が見れない。

用件を済ませたら、逃げるようにして去って行ってしまった。

エレミアはベッドで仰向けになった。

早くヨハネに逢いたいな。そんなことばかりしか頭になかった。深呼吸して、心の中で「がんばろう！」と言い、起き上がった。

そのとき、化粧台の上におかれていた花柄の写真立てにめが行った。

写真には陽気な女性とエドワード、まだ幼いころのクリスが写っている。

愛の溢れんばかりの一枚の写真だ。この人がおそらく母親なんだろう。

写真でエレミアの気持ちが和やかになった。

エレミアはビラを配りに行くため、作業を中断して休憩しているクリスに声をかける。

「あ、も、もう行かれるんですね。これビラです。」

広場はカツパーベース広場、知ってますか？地図でいうところ
です。」

「ここなら知ってるわ。」

「よかった。では、おねがいしますね。」

「うん！いつてきます！」

エレミアはピラをもって出発した。クリスはもう一声かけてエレ
ミアに伝えた。

「あー！キャッチフレーズは

『俺の武器は世界ー！自慢の腕！エドワード工房』ですからね

く！」

「わかったわー！」

エレミアは振り向いて返事をしたあと、広場へ向かっていった。

広場には多くの人でにぎわっている。

大道芸人や、カーペットを敷いて露店を開いている人もいる。

エレミアは先ほど号外を配っていた人の場所、一本の木を陣取っ
て、

すこし恥ずかしがりながらも、キャッチフレーズを言いながらピ
ラ配りを始めた。

「おれのー武器はー世界ー！自慢の腕！エドワード工房をよろし
くー！」

おなじみのキャッチフレーズだった為か、

あっという間にエレミアの近くに多くの人が寄って集まってきた。

ピラには特売という文字が書かれていたが、人々はそれよりも、

エレミアに興味を示した。

あの男くさい工房に、こんな可愛げのある女の子がいたなんて。誰もがおどろいた。

そして知らぬ間にうわさは広まって、エレミアの存在はラーゼン中に知れ渡った。

そのお陰で工房にお客が見えてくる日が多くなってきた。

エレミアは商談する客にお茶を出したり、エレミアを目的で寄ってくる

客に笑顔で応じたりもした。時にはクリスに付き添って、彼の汗を拭いてあげたりもした。

難なくこなせて、あっという間に1週間が過ぎ去ろうとした。

そしてとうとう別れの前日である夕ご飯の時間。

食卓テーブルにはエレミアとクリス、エドワードが座っている。

食事を始める前に、エドワードは一週間分の給料と地図をエレミアに渡した。

「それがエレミアの給料だ、もらってくれよな。

それとこれは世界地図だ。必要になるだろうから持って行くと

いい。」

「ありがとう！おじさん！」

「礼をいいてーのはこっちのほうだ。はっはっは。それじゃあ、飯にすつか！」

「うん！いただきまーす！」

みんなは食事を始めた。しかし、クリスは食事がのどに通らないようだ。

なにか考えている様子だ。クリスは席を立ち、場を離れた。

「僕はもういいや……。ごちそうさま。」

エドワードは食事に夢中で気にも留めなかったが、エレミアは気になって仕方なかった。

食事が終わったあと、エレミアはシャワーを浴びた後、寢床についた。

再び化粧台の上に飾られている写真立てに目が行って、手にとつて眺めていた。

その時だった。ドアの向こう側に人のいる気配がするのを感じたエレミアは、

去っていかうとするクリスを呼び止めた。

「まって。」

クリスはドアを開けて中に入ってくる。写真を見ていたエレミアに話を始めた。

「そこに写っているの、母さんなんだ。僕がまだ幼い頃に事故で……。」

「そうだったの……。綺麗な人だね……。」

エレミアは感じていた。一週間という短い時間ではあったが、共に生活してゆく中でクリスは次第にエレミアを母親と思うようになったのだ。

エレミアはベッドに座り、クリスを呼んだ。

「こっちに来て、クリス。私は母親にはなれないけれど……。」

クリスは涙ぐみながらエレミアのもとへよっていった。

そして、クリスは小さい頃によくしてもらった膝枕で涙を流し、

抑えきれない感情で泣き始めた。

エレミアは優しくクリスの頭をなでて言った。

「ずっと私はここにいますからね。クリス。どうかさびしげらないで。」

しばらくして、落ち着いたあと、クリスは涙を拭き、

照れくさそうにエレミアに「ありがとう。」とお礼を言った。

彼の心は快晴のようにスッキリとしている。

エレミアは笑顔で返した。クリスは静かにドアをしめて行った。

翌日、エレミアは旅立つ支度を済ませた後、エドワードとクリスに別れの挨拶をした。

「エドワードおじさん、クリス、いろいろとありがとう。」

「ああ、気にするんじゃないよ。がはは。また来てくれよないつでも待ってつからな。」

「うん！それじゃあ、またね！」

エドワードとクリスは遠く離れていくエレミアの顔が見えなくなるまで

手を振って見送った。クリスは長い間、見せなかった本当の笑顔を表しており、

エドワードがそれに気付いて言った。

「ん？お前、何かあったんか？えらい機嫌がいいじゃないか。」

「うん。（ありがとう・・・、エレミア。）」

【第一章】 因縁の戦い（後書き）

【入手したアイテム】

- ・ラーゼンの地図
- ・世界簡略地図
- ・ディアス通貨札

【入手したアーティファクト】

- ・くすねた一枚のビラ

第一章<第二節> 若き羽ばたき

第二節 若き羽ばたき

エレミアはしぶしぶ別れを惜しみながらも、目的地である飛行船乗り場へ向かっている。

歩く街の中で人を見つけると、若干目線が気になってしまう。

なぜなら、エドワード工房で看板娘をやったあの日から、

エレミアの知名度は高くなったからだ。彼女は過去のことであってもか、

有名になることにあまりいい思い出を残したことがない。

今日はなにやら突風が吹いてくる数が多いような気がする。

なんとなくそう思いながら、人が多く出回っている市場通りへ出た。テントを張ってその下で食料品を売ったりする、良く目にする商店だ。

エレミアは飛行船の運賃を遥かに上回った給料で一つの洋ナシを購入した。

食べながら歩き、そして、時々地図をみながら飛行船場へ歩いていく。

「こんどはヨハネとここで買い物したいな。」

もうすぐヨハネと逢える。そんな気持ちがあったためか、未来予想図をいつの間にか開いていた。

市場通りを過ぎてゆくと、目の先には荒廃した土地ととげとげしい山が連なった景色が見えてきた。

歩いているエレミアの足を止める一人の男が声をかけてきた。

「おい、その人。その先に行く気かい？」

エレミアは振り返った。そこにはヒゲを生やした緑色のローブを身にまとった

四十歳くらいの男が立っているではないか。腰には長剣を携えている。

男はエレミアに注意を促すために話をした。

「この先はソードマウンテンといって剣のような山が無数に広がっている。

かなり険しいところだ。命を落としかねない。

特に用がなければすぐさま引き返すことだ。」

「は、はい……。ありがとうございます。」

「わかってくれて何よりだ。あそこには……。いや、なんでもない。

最近、妙に突風の吹く時間が長いようだな。嫌な予感がしてならない。

あんたも気をつけたほうがいい。それではな。」

エレミアはあさいお辞儀をした。男は何処かへ去っていった。

もう一度、地図を確認していると、目的の曲がり角より先へ通り過ぎて行って

しまったらしい。

「考え事していたら、行き過ぎちゃったのね。」

来た道を引き返すエレミア。すると、向こう側から何名か白衣を着

た科学者が

ぞろぞろと列を作って歩いてくる。その団体は大きな建物の中に入っ
ていった。

建物のガラス窓からは薄暗くて何も見えない。

軽く興味をもったエレミアであったが、すぐに心が入れ替わり、
引き続き飛行船場へと歩んでいった。

飛行船場は少々小高い丘の上に作られており、なんども階段を登る
ことになった。

こういう地形には慣れてないためか、エレミアは息切れをし始めた。

「ハア、ハア。こんなに階段があるなんて、さすがに辛くなってき
ちゃった。

でももうすぐだから、がんばらなくっちゃ……。」

必死で階段を一段ずつ登ってゆき、ようやく目の前に飛行船場が現
れた。

エレミアは飛行船をみて感動した。先ほどの疲れがふつとんだ。

パステル調の空色の飛行船。モチーフはツバメのようである。

エンジン機のようなものは見当たらず、

機体のしっぽからエメラルド色のオーラが生じている。

飛行船は3台到着できるスペースがあり、乗り場は人間の背丈くら
いある柵が

しっかりと備わっていたが、すぐ下は崖になっていて、一際危険な
場所といえる。

エレミアは近くにあった乗船券売り場でチケットを購入し、

船が到着するまで、隣にある喫茶店に入って一息つくことにした。

椅子に座り、店員が注文を受け付けにやってきた。

エレミアは暖かいカフェオレを注文した。
何分もしないうちにカフェオレがやってきて、エレミアはゆったり
気分で

カフェオレを飲みながら、のどをうるおした。

そう……。これが彼女にとっての最後の休息になるとも知らずに
。。。

カフェオレを飲み終えたとき、ちょうど良いタイミングで飛行船が
やってきた。

エレミアが乗るA機だ。少し急ぎ足でレジに向かい、お会計を済ま
せる。

喫茶店からでて、そのまま乗り場へ向かった。

目の前には大きな飛行船が。

何人も乗客が列を作っていた。

高所恐怖症のエレミアは両側の柵にしっかりとしがみ付きながら、
乗客の列に並んでいった。

「うわぁ。。。。」

飛行船と乗り場の通路の境目までたどり着いたところに、
乗組員が乗船券のチェックを行っていた。

エレミアは片手で柵をしっかりと掴み、もう一方でチケットを渡し
た。

「毎度有難うございます。空の旅を満喫ください。」

今の心境で満喫するところではない。早く飛行船に乗ってしまおう。
エレミアは飛行船と乗り場通路の境目から覗く地獄の景色に青ざめ
ながらも、

飛行船に飛び乗った。

それから、次から次へと乗客が入ってきて、最後の客が乗り終わり、座席に座った後、乗組員が出航の合図を出した。

「出航します！席を立たないでください。」

飛行船はゆったりと動き出し、少しずつスピードをつけてラーゼンを離れて行った。

第一章<第三節> ディアス帝国

第三節 ディアス帝国

やっとの思いで飛行船に乗ることが出来たエレミア。ほっと安心したのか、いつのまにか眠ってしまう。

しばらくして目を覚まし、飛行船の窓から景色を眺めた。

そこからは、大きな火山、広い砂漠、そして、紅色に染まった家々が流れ込んできた。

おそらくフラムベルグ大陸に到達したのだろう。

もうすぐだ。そう思い、背伸びをした。

乗組員が乗客たちに連絡する。

「まもなくディラス帝国に到着します。到着時は席をおたちにならないように。」

飛行船はスピードを落とし、ゆっくりとディラス帝国に近づいていった。

エレミアは窓からディラス帝国を見渡した。

国の中央には大きな宮殿があり、それを取り囲むように要塞と思われる建造物が

敷き詰められている。さらにその周りには、先ほど見た紅色の民家が立ち並んでいる。

飛行船は距離をはかり、高度を下げながら旋回して、ゆっくりとディラス帝国へ到着した。

「お疲れ様です。ディラス帝国へ到着いたしました。お荷物お忘れ

なく。」

エレミアは飛行船から降りて、ディアス帝国の地に足をつけた。その瞬間、広がる世界が壮大すぎて、頭の中がパンクしそうになった。

深呼吸し、こころを落ち着かせる。

「ふう〜。すごい国……。一週間あっても回りきれないくらいだろうな。」

飛行船場を離れ、紅色に彩る新市街へと歩いていった。好奇心溢れ、小走りで新市街を渡っていた。

しかし、延々に続く街並みにエレミアは疲れて歩みを止めてしまった。

膝に手をつけて息を切らしながら、近くの馬車に目をつけた。黒い車体で黒い馬が二頭つながれている。

エレミアは白髪頭のタキシードを着た運転手に話しかけた。

「あの……。この馬車は乗れますか？」

「ええ、もちろんですとも。ただし、運賃はかかりますが。ご利用されますか？」

「はい。お願いします。」

エレミアは馬車に乗り込んだ。運転手は行き先を聞いてきた。

「どちらに向かわれますか？」

「う〜ん、お買い物がしたいわ。」

「それでしたら、商店街のほうですね。かしこまりました。」

そういうと、運転手は馬車を走らせた。
さすがに馬車のスピードは速く、あっという間に住宅街をぬけていった。

こんどは、中央広場の景色が広がった。

中央には龍にまたがった皇帝のブロンズ像が堂々と立ち誇っており、多くの人間が交差している。

歩いている人を見ると、そのほとんどが国民を守る兵士や、騎士、新米の戦士ばかりである。

街の建物に等間隔でディアス帝国のシンボルと思わせる、赤き龍と剣の紋章が描かれた旗がかけられている。

馬車はそのまま走り続け、ようやく商店街にたどり着いた。
運転手はゆっくり馬車の速度を落として停車した。

「つきましたよ、お客様。こちらが商店街です。

またのご利用をお待ちしております。」

エレミアは降りて商店街を見回しながら言った。

「すごい。こんなにお店があるなんて。」

一日中、シヨツピングめぐりといきたいところではあったが、本来の目的である、漆黒の大地へ行く事を忘れてはいなかった。とりあえず、フラムベルグ大陸の地図を購入すべく、道具屋さんに寄ってみた。

冒険の必需品ともいえるコンパスや、つるはし、帽子からカバンまでありとあらゆる道具が取り揃えられている。

エレミアは女性の店員に話しかけ、この大陸の地図を購入した。

お店を出た後、早速パッケージの袋を開けて地図を取り出した。紙の刷りあう音をたてながら、折りたたまれた地図を広げる。漆黒の大地はディアス帝国の南にあり、歩いて半日かかるくらいの距離があった。

「こんなに遠いと日が暮れちゃうわ。また馬車に乗っていききたいけど……。」

でも危険な場所に連れて行ってくれるわけが無いし……。
しょうがないや、ここはがんばらなきゃ！」

エレミアは決心した。

もう一度、さっきの道具屋で水と非常食を購入し、
休む間もなく、漆黒の大地へと向かっていったのだった。

第一章<第三節> デイアス帝国（後書き）

【手に入れたアイテム】

- ・ 飲料水
- ・ 非常食
- ・ フラムベルグ大陸地図

第一章<第四節> 消えない想い

第四節 消えない想い

馬のひづめが、街の整備された地面のタイルをけって音を出す。エレミアは城下町の門前まで馬車を利用して移動していた。門までたどり着くと、賃金を渡して降りた。

目の前に広がる大地。それは、帝国の街中とは違ってかわって、柿色の土と、枯れかかった植物、乾燥した空気が漂っていた。エレミアはこれからきつと大変な遠足になるだろうと思いい、気を引き締めた。

体操で軽く足の筋をのばして慣らし、歩き始めた。

ちょうど春を迎えるこの季節。

しかし、この地域はラーゼンとは違い、少し暑いくらいだ。土の色といい、植物の花といい、まるで紅き龍の背中のような。5分が経過したところで、エレミアはのどの渇きが気になり、すこし水を飲んだ。

何事も考えずに、ただひたすら歩いてゆく。

さて、何時間がたったのだろうか。固い意志を持っていたエレミアであったが、あまりにも環境の厳しさに、挫折しそうである。

途中で見つけた木の枝を杖代わりに、フラフラの体を一生懸命支えながら、前に突き進んでいった。

しかし、とうとう彼女は疲れ果てて歩みを止めてしまった。

「ちょっと休もう……。」

エレミアは偶然にも岩山を見つけ、その穴ぐらのなかで涼しんだ。ちよつとお腹もすいてきて、買ってあつた非常食をとりだして食べ始めた。

ジャガイモのなかに炒められた肉と野菜がミックスされたようなものである。

口の中がパサパサになり、非常食を傍らに置いて、ポシエットから水を取り出した。

水で食べ物を流し込んだ後、もう一度非常食を手に取りうとしたとき、

非常食は忽然と姿を消してしまった。

「あれ? ……ない!」

エレミアは周辺を探した。しかし、見当たらない。

自分ひとりしかないのになくなるなんてあり得ない。

パクパク、ムシヤムシヤ

岩山の外で音がする。

エレミアは穴ぐらからでてみると……、

そこには非常食をむさぼる一匹のラクダがいるではないか。

「わたしの食べ物か! この! どろぼろ!」

良く見てみると、そのラクダには大きな荷物が積まれてあつた。

エレミアの怒りの声によって飼い主が気付いて戻ってきた。

「アワワワ……こらっ! タヌちゃん! なんて事を……。」

「あなたは……？」

「アラララ……すみませんね。少し目を離している際に……。私はですね、通りすがりの商人といっておきましょうか。」

商人は少し小太りで、見るからに怪しげなアラビアン風の男だ。

エレミアは不思議がって質問しようとする、むこうも質問がかぶってしまった。

「なんで商人さんがこんなところで？」

「それにしても一人でどうしてこんなところに？」

商人は手を揉みながら、答えはじめた。

「はい、実はですね、少しキケンな商売をしておりますね。

漆黒の大地にちょっと用事があるんですよ。へへへ。

詳しいことまでは教えられませんがね……。

あなたは一体……？」

「わたしも同じところへ行くつもりだったの。

最後の決戦をみにいくの。」

「そうだったのですか！奇遇ですね。

ヤジウマってやつですかね……？シシシ。

そうだ、先ほどのお詫びといいますが、タヌちゃんに乗って行きませんか？」

「いいの？」

「はい。これからもう少しありますからね。

それに人様の物を勝手に盗んだままじゃ、商売根性が許せませんか
らねえ。」

「やった〜！」

エレミアはラクダのタヌちゃんに乗せてもらい、岩山を後にした。

あつという間に日は沈み、お月様が顔を覗かせた頃、
ようやく漆黒の大地に到着した。
月の光がまぶしいくらいに辺りを照らしている。

漆黒の大地……。大地は荒れ果て、毒々しい植物が生えており、
はだかの木々は朽ち果てていった過去の歴史を物語っている。
エレミアはタヌちゃんから降りた。商人と一緒にもう少し先へ歩いて
いてみた。

ここは人が来る場所ではない。五感で感じずともわかる。

カキーン!!!!

剣の音がして、二人は足を止め、急いで枯れた大木に身を隠した。
エレミアと商人はそっと音のするほうを覗き見た。

するとそこには、勇敢に戦う英雄ケテルと黒いローブの男がいるで
はないか！
両者ともにらみ合っている……。

（ヨハネ！やっと見つけた！でもなんであんな服装に……。
まあいいや、早くへんな黒いやつを倒して一緒に帰ろつと！）

エレミアはもういちど大木に身を隠し、タイミングを見図って出て
行こうと思った。

ドスンッ

一緒に隠れていた商人の肩にぶつかってしまった。

ごめんなさいと言おうと顔をみると、
なんと！商人の体から無数のキノコが生えているではないか！
商人はガチガチに固まって呼吸も止まっており、重たい体がエレミアの方に倒れてきた。
エレミアは避けて思わず声を上げてしまった！

「キヤアアアア！」

その悲鳴で戦いの最中である二人はエレミアの存在に気付いてしまった！

二人の前に姿を現してしまったエレミアは棒立ちしている。
ケテルはエレミアの姿をみて言った。

「な・・・っ！なぜこんなところに女が・・・?!」

滅亡の使者である黒いローブ姿の男から声がする。

「貴様・・・、仲間がいたのか・・・。」

まあよい、人間ごとき一匹増えたところで、なんら変わりはないのだからな・・・。」

滅亡の使者はケテルに襲いかかった！

毒々しい紫の両腕を伸ばし、鋭いカギ爪でケテルの首をとろうとした！

だが、ケテルは七星剣でその攻撃を防御する！
剣と紫の両手が強く押し合っている！

ケテルは必死におさえつつ、声を発した。

「どうしてこんなところに来たのだ！女っ！早く逃げるんだ!!」

今ならまだ間に合う！さあ！早く!!」

一瞬、あの時の記憶が蘇ってしまった。

エレミアは二度とあのような体験を味わいたくなかった。

「やつ、やだ！もうヨハネに離れたくない！私も戦う！」

エレミアは飛び出して、念動力で滅亡の使者の両腕をはじき飛ばした！

滅亡の使者は三人分の間隔ほど後ろに下がって間合を取った。

エレミアはケテルの少し前でかばうように立っている。

「ほう……。それなりに力のある人間ではないか。

それに我の瘴気をもともしない。

常人ならば地獄のキノコに食い尽くされるところなのだが……。

今までに見たことの無い能力。面白い。

だが……。ケテルよ。貴様の仲間ではないのか？」

ケテルは脂汗をかいて、エレミアを見ながら言った。

「違う！彼女には手を出すんじゃない！

早く逃げるんだ！私はヨハネではない。人違いだ！」

人違い……。？確かに声も違うし、年も違う。

エレミアはケテルの姿を良く見て、少しずつ自分の思い込みに気付いていった。

そんなこともお構い無しに、滅亡の使者は再び攻撃を試みた！

滅亡の使者は体から黒い霧をふきだした！

その霧は辺りの花や小動物たちを一瞬にしてゾンビのようにカラカ

ラにしてしまった！

それを見て危険と察知したエレミアは念動力の壁を作り出し、自分とケテルを黒い霧から身を守った。

不気味な笑い方をしながら、滅亡の使者は言った。

「クククク……。器用な奴だ。

これまでに無い手ごたえを感じる。普通に殺すだけでは勿体無いな。

これはどうだろう……。？さあ、苦しみを味わうがいい……。」

滅亡の使者はエレミアの目の前に寄って来た！

だが、攻撃してくるような素振りはない。

ローブのフードをかぶっているが、その中には顔が無く、真っ黒である。

エレミアは念動力の壁を張り続けながら、滅亡の使者の威圧感を感じ、

すこし身を引いた。

その途端、ケテルが大声を放った。

「女っ！奴の顔を見るな！！」

もう遅かった。

エレミアは不思議に滅亡の使者の真っ黒い顔に釘付けになってしまっていた。

見続けていくうちに、一瞬、鏡のような光を発し……。なんと……。ヨハネの顔が闇から現れたのだ……。

エレミアはヨハネの顔を見ると頭の中が混乱してしまった。

「どうして……。？どうして滅亡の使者が……。ヨハネ……。？」

念動力が弱まってくる。

滅亡の使者はそれをチャンスに、ナイフのような鋭い爪でエレミアの体を貫いた！

グサツ！！！！

混乱が解けたあと、ハツとして目の前を見た。

そこには、腕で体を貫かれているケテルの姿が……。
エレミアをかばったのだ。

「そ……、そんな……。」

ケテルは口から血を流しながらも、滅亡の使者の腕を必死に掴んでいる。

そして、大きな声で叫びながら、七星剣を握っている腕に力を込めた！

「うおー！！！！」

ケテルは七星剣で滅亡の使者の心臓をめがけて突き刺した！

滅亡の使者は絶叫した！

「ぐあああああああ！！」

滅亡の使者は何歩かのけぞってゆき、

立ち止まり、両手を挙げて黒い煙を放ちながら爆発した！

さらに、その中から暗い紫色の魂のようなものが8つ飛び出して、彷徨うように上空で旋回した後、

魂たちは四方八方へと飛び去って行った……。

深手を負い、倒れるケテル。

エレミアは急いでそばへ駆け寄って座り、名を呼び続けた。

「ケテル！しっかりして！ひどい怪我……。」

どうしようもない状況で、エレミアは涙を流し始めた。

虫の息であるケテルは、わずかに残っている意識を保ち、かすれた声で伝えるべきことを口にした。

「女……。無事か……。よかった……。」

よく聞いてくれ……。」

滅亡の使者は完全に消滅していない……。」

奴は分裂してしまった……。」

だが……。まだ希望はある……。」

完全体にならないうちに……。倒すのだ……。」

これを……。」

そう言うと、ケテルは七星剣をエレミアに託した……。意識が朦朧とするなかで、ケテルは続けて伝える。

「この七星剣を……。皇帝ディアスに見せるのだ。

力になってくれるだろう……。」

あとは……。た……。のむ……。」

全てを伝え終わったあと、ケテルの体が光だし、

完全に真っ白い光となり、天に召されるように消えていった。

エレミアは二度もヨハネを失ってしまったかのような感覚が頭の中を渦巻いた。

「私のせいで……、私のせいでケテルさんを死なせてしまった……」

悲しみに浸って座り込もうかと思った。

だけれども、そんなことをしても何も始まらない。

涙を拭いて意識をしつかりと持つエレミア。

ヨハネも持っていた、七星剣を見つめながら、心に誓った。

「決めた！私、ケテルさんの死を無駄にはしないわ！
必ず、滅亡の使者の分身を倒して見せる！」

七星剣を握り締めていると、なぜかヨハネが近くにいるような
そんな感じがして、エレミアの心は落ち着いた。

「ヨハネ……。私と一緒にいるんだね……。
わたし……、がんばるからね……！」

第一章<第四節> 消えない想い(後書き)

【手に入れたアーティファクト】

- ・七星剣

【消費したアイテム】

- ・飲料水
- ・非常食

【手に入れたアイテム】

- ・奈落茸

【第二章】 新たなる始まり

【第二章】 新たなる始まり

第一節 難解な誤解

エレミアは七星剣を抱きしめながら、ケテルの意志を継いで、滅亡の使者の分身を倒すことを決意していた。

静寂に包まれていた漆黒の大地。突然、男の大きな声が轟いた。

「ケテル様ぁー！ー！！」

行き成りどこからか一人の男性が飛び出してきた。

どこかの部族だろうか。インディアン風の格好をしている。

エレミアは声にビククリしてその場から離れようとした。

「キャアアアー！」

「まて！貴様！逃さんぞー！」

追いかけられるエレミア。懸命に逃げるが、男の足は速くて捕まえられそうだ。

何とか振り切ろうと、お得意の超能力「サイコウエーブ」で男を吹っ飛ばした。

力の調節ができていなかったためか、男は3メートルほど激しく吹っ飛んで、

地面に叩きつけられた。

これでなんとか切り抜けられる！

だが、そう甘くはなかった。

前方からさっきの男の仲間であろう者達が2名、行く手を阻む。右や左へ逃げようと思いきや、そこから追っ手がやってきた。そしてとうとう、取り囲まれてしまい、ピンチに追い込まれた。

先ほどの吹っ飛ばされた男が、仲間らの輪の中をかくぐって、エレミアの真正面に立った。おそらくこの男は部族長なのであろう。エレミアは部族たちの鋭く睨む視線で硬直してしまう。部族長は怒りに満ちた形相で質問した。

「貴様……、ケテル様に何をした……？」

「……」

答えを返そうにも、恐怖のあまり言葉が出ない。

部族長はエレミアの持っている七星剣を目にして、顔をさらにくしゃくしゃにして怒りが込みあがった！

「それは七星剣！貴様……やはりケテル様を……。よくも……
……！」

部族長は腰につけていた剣を抜き、それにあわせて取り囲んでいる部族らは

手に石を持って今にも投げつけてきそうな体制になる。

部族長は大声で叫んだ！

「ケテル様の仇いーいー！！！」

「キヤーーーーー！！！」

もはや絶体絶命か・・・?!
うずくまり、両手で頭を押さえ込むエレミア。
だが、急にその場の音はプツンと消え去った。

恐る恐る、ゆっくりと顔を上げて見てみると、立ったまま気を失っている部族長の姿が。

取り囲んでいた仲間たちも体をダランとさせて、
目がうつろになったまま、棒立ちしている。

エレミアは立ち上がって、今の状況に疑問を抱いた。

「な、なに？何が起こっているの？」

部族の体をつついて確認しても、うんともすんともない。

「その人・・・、今のうちにこっちに・・・。」

エレミアを呼ぶ少年の声がする。

そのほうへ振り向くと、そこには陰陽師服を着た男の子がいるではないか。

みるからして14歳くらいだろうか。

男の子はエレミアの手を引っ張って、一緒に走ってその場を離れていく。

エレミアは状況がつかめず、走りながら男の子に質問した。

「いったいどうなってるの？ハア、ハア、君はいったい・・・？」

「僕の幻術で幻覚を見ているんです。」

話した後です、術が解けないうちに早く逃げましょう。」

どこへ行くこうと言うのだろう。とにかく今はこの少年を信じるしかない。

黙々と走っていつていると、だんだん、潮の香りがやって来た。生命の吹き込まれた大地、ところどころに咲く青い花が見られ、やがて海岸が見えてきた。

海には一艘の船がとめられている。

少年が船に乗っている運転手に声をかける。

「もどりました！」

「若様、今はしごを下ろします！」

ガラガラと音を立てながら、はしごが下ろされた。

少年はエレミアに言った。

「さあ、船に乗ってください。一旦この国を離れましょう。」

「わ、わかったわ。」

二人ははしごを上ってゆく。少年はひよひよいと登っていったが、エレミアにとっては苦行であった。

一段、また一段とゆっくりかつ慎重にのぼっていき、なんとか船に乗り込んだ。

中は温かみのある木でできている。

赤で塗装された船体は、まるで神社の建物を連想させてくれる。

エレミアと少年が船室に入ると、それを確認した運転手は、錨を上げて船を出した。

船は静かな波をきりわけながら、フラムベルグ大陸を離れていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0795ba/>

星の使徒 ~ 古の賢人 ~

2012年1月6日16時49分発行